

室生犀星「かげろふの日記遺文」の人間像

外村 彰

一 はじめに

室生犀星「かげろふの日記遺文」(『婦人之友』昭三三(五二卷)・七(三四・六)は、平安朝の古典「蜻蛉日記」上中巻を換骨奪胎した長篇小説である。執筆の機縁は『日本国民文学全集7』(河出書房、昭三一・二)収録の「蜻蛉日記」現代語訳の依頼^①で、犀星はそれまでの王朝小説で培った創造力や人間観を投入して「原典から大幅に逸脱した、犀星版の新しい物語」を作り上げた。初刊本(講談社、昭三四・一一)の「追記」に自ら「王朝物」の「卒業論文」と叙したように、作者会心の作であり、刊行後には第七回野間文芸賞を受賞した。その際、川端康成が「一朝一夕の作品ではなく、一世一代の作品とほめるのも、俗な気がする」との讃辞を送り、当時から犀星文学の到達点とみなされてきた。

「かげろふの日記遺文」の人物形象には、原典との様々な相違点が存する。道綱母に「紫苑の上」、「町の小路の女」に「冴野」といった固有名が付され、藤原兼家や時姫ともども、その官能や心理のうつろいに多くの筆が費やされている。原典にみられない冴野の前夫・藤原忠成、後半から兼家を通い出す「あたらし野の姫」も造形されていた。幼い道綱の描写がほとんどないのは、成人男女の愛欲模様を絞って書かれた小説ゆえであろう。

「蜻蛉日記」を典拠とする近代小説は他にもあるが、それらとの顕著な

違いは、原典においては端役でしかない「町の小路の女」冴野をクロウズ・アップして描いたところにある。冴野の性格、彼女が兼家や紫苑なにし自らの運命に向かう姿勢は作者の独創による。初刊本の「あとがき」で犀星は、産んだ子を亡くした後「捨てられ」た「町の小路の女」に、自身の生母の「若い日を思ひあて」たとし、同時に冴野を通して「若い頃のすくひを貰」って来た「淪落の人」の「無飾の純粹」を書き残したことの願いを込めた、と記していた。

これまで「かげろふの日記遺文」には、多くの論が書かれている。それらを笠森勇が丁寧^②に読み解いており、先行研究史を知るには便利である。なかでも刊行当時の、福永武彦による「作者の情熱は、永遠に変わらない人間の哀れさ、特に女の哀れさを、王朝の小説の額縁の中に捉えることにあつた」「従って出来上つたものは、一種の人生観小説といったようなもの」との評価は、以後の研究の指針となつた見解といえよう。近年まで、多くの論者がヒロインを冴野とした読解を試みてきたが、戸塚(安元)隆子^③のように「愛の世界の深淵に向つて進んでゆく」紫苑を主人公に据えた説もみられる。いずれにせよこの小説の本質は、王朝時代の男女の愛を通して人間存在の「哀れさ」を描き、そこに「人生」の不変相を表わそうとしたところにあると考えられる。

では「かげろふの日記遺文」が物語る「人生観」とは何か。そのことにつき考えるには、「哀れ」を感得させる冴野・兼家・紫苑の人間像、彼

らの心理的な関係性を明らかにしなければならぬであろう。なかでも「作品全体が一種の夢幻劇のようなムードを持」つ主因となっていた、二度にわたる生霊めく冴野の登場場面に注目したい。以下、三者をめぐるドラマを通した人間観の内実、あわせて幻想性のもたらす意味について論じてゆきたい。

二 兼家と冴野、そして紫苑

「かげろふの日記遺文」は、平安朝の貴族社会における、招婿婚・一夫多妻の時代を枠組として展開する。ここでは男性達が自由に愛の対象を求め歩き、女たちが男の放埒に耐えながらその訪れを待つ、という図式が前提として設定されていた。貴公子・藤原兼家は、清岡卓行が「優越と慙愧」を「十字架として背負っている」立場にあつたと指摘したように、「女を見ること」すなわち漁色と「たくさんの人の悲願を裏切つてゐる」との慙愧の念の間で揺れ惑っている存在でもある。

兼家は「右兵衛佐で右大臣師輔の三男」で本妻の時姫がおり、道隆以下の子達の父親だが、紫苑から冴野、後にあたらし野の姫の許にも通う「稀代の色好み」でもある。「しづまるといふ時」のない彼の「少年の心」の時姫が諫めても、「男といふものは悲歎の中にゐても、結局、女の許でそれを解くより外にすべがない」と応ずるほどの「横着者」である。ちなみに原典との比較を詳しく行なつた上坂信男は、「兼家は平安の世の習俗に乗つて一夫多妻を当たり前のことと思つているから、妻の悲しみなど分かつたしらないで、ただ快いもの美しい者に憧れて行く。それを時姫は『少年の心』と表現したのだろう」としていた。

しかし兼家もそれなりに優しい。「誰にも柔しくしなければならぬもの」を持つとうとし、「たくさんの手を女に分けてあたへたかつた」と考え

ては「私くらゐ厭な奴はゐない」と自責してもいる。常に「女といふものの蜜」を求めてやまない彼は、時姫にこう話す。

男は情痴の赤ん坊なのだ、これが判つてくれる女は千年経つても世界にはゐないのであらう。男はつづまり孤独になつて死んで往くことになる、何千年も続いてゐる孤独は一人や二人の女によつて、壊されることはなからう。

この言葉には、あたらし野の姫から「殿といふ方は女の心のなかに住まうとして、結局、何処にもお住ひになれない」と評されたのを肯う意味もある。それぞれに誠意は見せても、「其処にも永くゐることが出来ないで、何かを尋ねて往かなければならない」のが、つまりは「男」の宿命、ということになるうか。兼家は内発する「情痴」の衝動ゆえに一人の女性の心のうちに住めずに、「女といふものの蜜」を求めてしまうのである。非情の性に発する情欲に衝き動かされる自己を「厭な奴」と観じながらも制御できない。遂にどの女性の心にも定住し得ない、男の「孤独」は、魂の満たされぬ渇きともなるが、本能には抗えず、あらたな女性の「蜜」を常に求めさせ、その魂をして流浪させる。

兼家に対し、時姫は「女はもつと深い孤独を背負つて、何時だつて一人で歩いて来てゐる」と応ずる。男が「情痴の赤ん坊」なのを知りながら、なおもその愛を信じたく、わが身に独占しようとし、心の中にその男を住まわそうとする。しかしそれでも男の止みがたい「情痴」は「少年の心」のごとく「しづまるといふ時」がないのである。

かような兼家には理想的な女性が、吉本隆明も「ただ生理的存在として没我的」と評していた冴野であつた。「かげろふの日記遺文」は全十二章だが、兼家と冴野の交渉が描かれるのは第三章「真孤草」からである。西洞院と室町の間の小路に住み「くちなはの君」と呼ばれていた冴野は、「或る皇族の孫」の子「元下総介源ノ雅房」が「身分賤しい娘に生ませた

娘」だった。母は早逝。父の死後「二人の男渡り」をしていた。かつての愛人の「素浪人」忠成とは、彼女を養うため夜盗まがいの所作に走ろうとしたのが原因で三年前に別れていた。なお兼家との子を死産した冴野が姿を消すのは第十章「あたらし野の姫」である。

貧しく身分の低い冴野は、しかし「ただ月のやうに美しい」。彼女には「学も智もない」が、豊満で妖艶な肢体の魅力にあふれ、兼家との「戯れにも遠慮がない」。従順で分を弁え、妬みもみせない。もし彼が自分に飽きたのならば潔く身を引くつもりでいた。「女といふ自分自身をあの位確かりと考へ込んでゐる人」を他に知らない、と兼家があえて時姫に告げたほどに揺るがぬ分別がある。やがて冴野は彼に宛てた手紙にこのやうに書く。

遂に殿がお越しが遠退いてしまひましても、お怨み申し上げること
もございませぬ。むしろ清しくごあんしんの行くやう、お別れをし
なければならなかつたら、お別れまうし上げたいと念じて居ります。
殿のお心を傷めずにお別れすることも、わたくしには終りの愛情の
しるしかとも思ひます。

冴野はすでに、男が一人の女性の許に「永くゐることが出来ない」、「情痴の赤ん坊」だという事実を達観して、感情に流されず冷静に、これから予測される別離も許容しようとしている。死産のあと、時姫の要請通り兼家から身を引くことにしたのは、船登芳雄^②のいうやうに「野の女の本来的な生理的決断」からだろう。しかし「渡りの女」を覚悟して去るにしても、金品の受けとりは謝絶する毅然とした女性でもあった。

こうした描写から、冴野が自ら計らわず、男の性を全肯定して受け容れ、悲しみに見舞われても心乱れぬやう内面を整え生きられる、あまりに包容力に長けた人格の持ち主であったことが知られる。それにしても、二十歳過ぎの若さにして「信仰をもたないで野の女としての自分を作り

上げ」たという自我の安定ぶりはどうであろうか。そもそも彼女は兼家のような男が好む通りに描かれすぎてはいないか。

そのような冴野を榎本隆司^③は「はじめからひとつの個性として描かれていない」存在だとする。そうして「冴野を類型化し『女』として普遍化」させ、そこに「一途に『女』を追う男の思念を定着」させることで「性の問題へと抽象化し、昇華させることを試みた」とも記した。たしかに、物分かりの良すぎる彼女の「没我的」性質は、普遍化された理想の「女」像、それも色好みの求める「性」のそれに昇華されたものやうである。

以上みてきたやうに兼家は、平安期の漁色家ながら、抗えない「情痴」の本能に命ぜられ、女性に安住し得ず「孤独」のうちに彷徨する「男」の典型を示す。冴野は、こうした「情痴」にまみれた男を無条件に許容し、素直に愛を与え、その男が去つても取り乱さぬ心構えを持つという、色好みの男性から見た女性の理想像を示す存在だと考えられる。

さて、それでは兼家の側室で文筆の業を「いのち」とまでみなす紫苑とは、どのような人物だったろうか。まずは冴野が死産するまでの、紫苑の心の移ろいを辿つておこう。

紫苑は、父の藤原倫寧^④に愛され、深窓育ちのまま兼家の側室となる。文才に恵まれていたが、父の裸も見た覚えがなく、寝る時に自分の肉体に触れずにいたほど潔癖だった。兼家から恋歌を貰い「いままでに作り上げた矜があともなく洗はれ、別の紫苑といふ女が現ははじめ」るのを意識するが、伶俐な性質だったため、いつも「心に奢りと位を持ちつづけ」るべく「美しい品」位を保とうとする。「酷い孤独」を胸に抱きながら契りを結んだ彼女は、「誠の男ではないと決めてかかつて」いる兼家との向後を心細く思う。

兼家はしかし、「女の気品」など常々「吐き棄て」て顧みない。紫苑の

裸体を眺め、そこに「一介の女」の「慾情のかがやき」をみようとする。兼家は、紫苑の抵抗は「歌才能文の誇り」ゆえと「意地悪い解き方」をし、その矜持を崩してかかるうとした。紫苑は心と身体の乖離を覚え、「兼家がゐてもゐなくても、一人であるといふ念ひ」を抱く。すすんで会話を求めなくなった紫苑に対して、兼家は親しみをなくしてゆく。

冴野のように「一介の女」とはなれない紫苑を兼家は理解せず、むしろ「黙つてゐながら何かを強ひて来る妙な人」だと疎ましく思い、ついには「私の本心はさういふ温かさを缺いてゐる女には、心まで奪はれることはない」と告げる。そうして「あなた様のすべてを占める女」とは「どのやうな姫」か、との問いに「女といふものの蜜」を沢山持つ「町の小路の女のやうな人」だと答え、冴野を素性卑しい女だと貶す紫苑にも話す。

「いや、少しも卑しくも低くもない、あの女らには、女が持たねばならないあまさが沢山にある。女が袿かきや襲かさねや位や学びを脱いだ本来の姿があるのだ。お身がその驚きをする前に、あの女がどのやうにして生きてゐるかを知らねばならぬ。女が女として生きるところの、ただ一つの生き方をしてゐるのだ。」

ここで兼家は、装いや気位、それに学問などは虚飾にすぎない、それらにとらわれず「自然に」男に愛を与え生きる「女そのまま」の女にこそ、自分は心を奪われる、と伝えたのであった。この台詞には、プライドの高さから虚飾を捨てず、「一介の女」の「慾情のかがやき」を見せようとならない紫苑への不満の裏返しも含められる。

しかし紫苑は「女が女として生きるころの、ただ一つの生き方」という男の願望の通りにはふるまえない、確たる個性を持っていた。まして、本妻のいる夫の支配下にあることを肯わず、身体ばかりが男の性に惹かれゆくことに精神の空虚を感じていた彼女であるから、歌のやりと

りのほかにほとんど会話がなく、性の営みのためだけに兼家を通つて来るような状況を悲観しており、つねづね兼家以上に強い孤独感を胸に持っていたものと推察される。

紫苑は「乳人めのとの郷の家」で兼家に愛された翌朝にも「茫然と或るくやしき」を抱き、彼とは「不自然な取り合せ」なのだとの嘆きの歌を詠む。兼家はしばらく熱心に紫苑の許に通うが、紫苑との睦まじい時間は得られず、満たされぬ彼女の心に「寂寥感」が募るうちに、兼家の夜離れよがが長く続くようになってゆくのである。

やがて時雨の時期となり、紫苑はいつも兼家を想い待つ身の「弱さ」とあわせて自分の「敗れた痴情」を凝視する。彼女は理性を「から」にするわが「痴情」に「引き込まれ」るのは、自らの「女の生き身」故とみなし、自己嫌悪に陥るが、この頃（天曆九年）父の倫寧が「陸奥の旅」に上ることとなった。このため彼女は、今までより一層「兼家をたよりにして行かねばならぬ重いもの」にのしかかれてしまう。

翌春、紫苑が妊娠をし、兼家は喜んで親切を尽くした。けれども紫苑は「子供をからだに持つことは、一層絶るものが殖えるだけ」だと嘆じ、八月に道綱を産出した折に「私はもうただの女に引き据ゑられ」た、と女性の身体が持つ宿命をして「みじめ」と観ずる。そこで紫苑は「書くことの外にいまの私に位はない筈」だと考え、自己の内面を吐露できる日記の執筆にいそむようになっていくのである。

さて道綱が産まれてまもなく、兼家が「町の小路の女」冴野の許に通っていたことを紫苑は知り、嫉妬に苦しむ。もはや「上品振つて」自己を客観視できるような心の余裕はなくなった。「不倖」に沈む紫苑は、夜中に戻ってきた兼家が叩く表門を閉めたままにし、冴野の許に退かせる。兼家への抵抗は示しながらも、紫苑は「この大事の前では立つて歩けぬことで、心にも形があることを、その悲しみと俱」に痛感する。

理性的で潔癖な育ちの紫苑は、男との性から精神と身体との乖離を覚え、兼家の望む「女そのまま」の女になれずにいたがゆえに孤独感に苦しむ。冴野に「女そのまま」の女を見ていた兼家は前渡りを繰り返す。それが自我の強い紫苑をより孤独にしているのである。

紫苑は時姫に冴野の存在を知らせ「不倅せ」になった者同士で手紙のやりとりをするようになる。翌年の夏に冴野が男子を死産するが、続く第六章「うたたねのまに」には、冴野が死児を抱いて紫苑の邸を訪れる幻想的な場面がみられた。ここまでの紫苑は、戸塚隆子の述べたように「男の施しを待つしかない乞食に等しい女の立場」にあった。紫苑は戸塚の指摘した通り「男女の〈情痴〉と制度を越えた愛の世界への階段を登ってゆく」わけだが、兼家の援助を頼りに生きざるを得ない立場に変わりはない。ただ、彼女の心の持ちようが、次章の幻想的な時間のうちに冴野と語らってから変わってゆくのである。紫苑は心と身体の非同一次性に悩んでいたが、次に引く冴野との出会いを経たことで、わが「痴情」に通ずる生き身を肯定的に見つめる余裕を持つようになったのである。

三 冴野のまぼろし

紫苑のいる部屋に突然、冴野本人が現われる——死児を抱いたままの恰好で——非現実的な設定で二人が出会う。実は冴野は、ほぼ同じ時間に兼家と逢っていた。冴野は彼がうたた寝していた間、ひとり死児を抱いたまま紫苑の部屋へと出掛けたのだが、こうした「ありえない」行動は、いわゆるテレポーテーションとしか考えられない。冴野は「いま雲から下りて来た」ごとく全身を濡らしており、臆さず「けふ、この子に連れられ伺ふことが出来ました」と話す。幻想的だが、彼女は亡児の魂の冥通力に導かれて来たのだろうか。

ともあれ、素直な冴野の言動につられて、紫苑は自分が「このごろ裸の女のはげしさがあるばかり」だと告白をする。紫苑はこの時期に「裸の女」を自覚したが、東郷克美が「学問や知識が問題でなくなる場所は、最終的にはお互いに『裸』の存在になる男女の間である」と論じたごとく、「裸」の自得は紫苑の、それまでの潔癖なり伶俐をかなぐり捨てた女性への変容を指しているよう。冴野は紫苑の美が「余りにきびし過ぎる」から、出来る限り「機嫌よく」兼家を邸に迎えるよう勧める。そうして兼家につき次のように述べていた。

二人も三人も、人を愛かなしがる男の方といふものは、自分のしてゐることの怖さを毎日殖かしてゐるかはり、毎日、恐ろしきで心は慄へてゐられるのです。(中略)そのためこそ、愛情を一つのところにまとめることに努めてゐるものなのです。心にあるものと、男自身の肉体にあるものと、この二つに何時も苦しめられていらつしやるのです。

冴野は、兼家の「苦しみ」に「入つて」みなさいという。「心にあるものと、男自身の肉体にあるもの」を抱える男が「昏れかける途をとほとほ歩いて」ゆく孤独な姿に共感するよう助言するのである。そこから紫苑は「知識」を重視していた自分には「裏側」としか見做せなかつた「女自身のよろよろしたもの」が男の情痴を包み込めることを教えられる。紫苑はそれから、兼家をもてなし、それまで「みだらな事」として来た自分の裸身、すなわち「知識よりもつと美しいもの」を初めて彼の前で見せられるようになった。

紫苑は冴野の「真正直」で「虚飾のない心」にうたれ、あらためて「殿に差し上げるもの」について教えられた。そうして冴野と自分が「思ふことはただ一つ」になって「一人になるやうな瞬間」が得られたとまで兼家に言う。かような「解き合ひの美しさ」を経た紫苑は、原典とはまっ

たく異なる展開だが、冴野への深い共感を持つに至るのだ。

さてやがて兼家はあたらし野の姫のもとに通い出し、冴野は「何処に往つても直ぐ自分を失ふ性質」を持つ彼を「むごたらしく」思うが、そこには同情が潜む。冴野はそのあと、時姫の要請で兼家から身を引くと約し、時姫に続いて訪れた紫苑にそう告げる。

ところで冴野の去った第九章「くる髪」の終りには、冴野の心理描写のあと「冴野よ、もし」で唐突に始まる兼家の独白が記されている。「そなたは私のかげにゐて、私を守り続けてゐるのだ」云々とある幻想的なモノローグは、時空を超えて届けられた兼家からの恋文と解せるであろう。あるいはこの箇所には、晩年の犀星が愛した、実在の『町の小路の女』への思いが込められているのかもしれない^⑩。

紫苑は、冴野の「無慾の思ひ切り」に感嘆し、兼家は冴野が去ってしまったという事実により「一さいの思念」が崩れるのを自覚する。そこで紫苑は以下のように考えていた。

冴野を去らしめるのは私のくはだてであつても、また、私の完成をなしとげるためにも、必要なことであつた。(中略)嘗て冴野は殿への愛情をとりいれるために、はだかになれと言つたが、その言葉は単なる裸になるための情痴の世界にばかりある、それではなかつたのだ、いま紫苑の上自身がなまの女として立ちあがつてゐる、そのはだかを意味してゐるものだつた。

紫苑はこのように、去りし冴野から多くを教えられたことで、すでに情痴ばかりでなく、人として自己を「はだか」の「なまの女」へと変革しうる階段に達していたようである。

兼家を想う「女の執念」ゆえに冴野が去つたのを自らの「恥」とみなす一方で紫苑は、彼女との「根くらべ」が「一生に一遍の女の爪を研ぐ機会」となっていたと得心してもいた。たしかに紫苑は強くなつたが、

それでも「情痴にところが奪はれる自分がいやにな」つて、「鳴瀧の般若寺」に籠ろうとする。これは兼家が無理に阻止して下山させるのだが、そこで紫苑は正面から彼への積年の不満をぶつける。

あなた様は私といふ女をこの長い年月の間に、一体どれだけの時間をかけてお考へくだすつたのでせうか、ただのお慰めだけに、どうすればもつと美しくもなり、気に入るやうな女になるかと、それだけしかお考へにならなかつたのではございませんか

兼家はたしかに紫苑に女性としての美しさは求めたが「いかにすれば学高い女になり名のある人になるか」とは一度も考えたことがなかつたと正直に返答する。二人の仲はその後長谷詣りをしようとした紫苑に兼家が激怒する場面、兼家が夢を介して冴野の長歌を知る場面を経て、以前よりも互いをより知り合い睦まじさを増して行くのであつた。

さて、冴野のまぼろしが登場するもう一つの場面、第十二章「再会」に移ろう。この章はあたかもメルヘン調に描かれた修羅場といひ得る。ある夜の居室で兼家が就寝した後、紫苑は傍らで半睡のまま、夫の胸に手を乗せつつ「一つの祈願」——捉えがたいこの男の心に自分の思いを「やきつけ」たいとの願いを抱く。そこに彼女を呼ぶ声が聞えて来る。

姿を現わした冴野はやつれ、「身なりも見すばらし」かつた。紫苑は「嚴重に妻戸も固め」た「深夜の褥」になぜ忍びこめたのか、と声をかける。冴野は「ただ殿にひと眼おめにかかりたいばかりの、心の緋りにございました。女にも、夜盗に均しい焦燥の気で、忍びこむ時がございませぬ」と答える。冴野は紫苑が傍に居るのを知りながら、兼家の胸にすがりたい一念で、夫婦の寝室に忍び込んで来たというのである。

彼女の無礼を「不逞のお心」となじる紫苑の眼と口を、冴野が冷たい手で強くふさぐ。冴野は「わたくしの生涯の最も盛んなこの宵、紫苑の上様、殿様は申し受けます」と告げ「いまの機会を外して」は「生涯

にお目もじ出来ないかも知れません」と兼家を起こし、着衣を促そうとする。戦慄を覚えながら抵抗を試みる紫苑は、冴野を「あばずれ」と罵るが、目覚めた兼家は「よくも迎へに来てくれた」と驚くでもなく応じ、急かす冴野に対し「すぐだ。今生では到底、逢へないと心が喘いで毎夜歎いてゐた」と答える。

そこで、紫苑は夫に「土のやうな深い渦が瞳をふくらがしてゐる」冴野が「夜盗のやうに邸内に忍びこんで来た」と非難の言葉を発した。手を離すよう冴野に命じた兼家は衣装を着ける。ここで冴野から「わたくしを打つてくださいます」と言われた紫苑は動揺し、にわかには短剣を床の間から取り、「殺氣」に充ちながら冴野にじり寄つたのである。

二人の女性は、兼家に「お心がいづれにあるか」と迫るが、彼は「そなた達のどちらにも負けを取らしたくない」と告げ、庭から通りへと去る。ここで紫苑は「殿、ご本心はもはや私にはございませぬのですか」と応じたが、冴野は違い、こう話す。

「殿、わたくしの許にも、いらつしやいませぬのね、今宵の、女二人の両面へのお心づかひ、冴野、生涯をこめて嬉しくお受けいたします。」

兼家は、そう話す冴野に「そなたの思ひの半分も頷れることが出来ないのが切ない」と返答する。「いいえ、殿、いただく物は、たくさんにするに、冴野は戴きました」と彼女は呼びかけた。紫苑の願いの通り、兼家は振り返る。それぞれに瞳を交わす三人の間に「お互を見入るという穏かさ」が流れる。

そこで三者は、それぞれに声をかけ合う。兼家は「そなた達はいま何といふお互の美しさを見せてゐることか。何か別の粧ひが蔽ひかかつて来てゐる」と。冴野も「殿、おすこやかに、」紫苑もまた「では、またの日にこそ」と、別れの言葉を口にする。この後、兼家は冴野と紫苑の「此

の世のあらんかぎりの美しい瞳」に見送られ「闇に融け」て去る。

ちなみに、ここでの兼家について犬飼廉は「その後姿はまことに孤独」であり、「はてるともない愛慾の竟いの姿」を表現していると述べていた。兼家は結局、独り去ることを選ぶが、ここで兼家の孤独は二人の女性から温かく見守られてもいたと読むべきであろう。

やがて、兼家と紫苑はほぼ同じ時に夢から覚める。とはいへ、二人は庭を去つてゆく何者かの存在を感受してもいた。紫苑は悪寒に襲われ、兼家は庭へ「まだ、そなたはいたのか」と声をかける。その折、紫苑は身の近くに「懐剣」を見つけ、夫と共に驚く。

二人は同じ夢を見、そこで同時に、無幻の時間を過ごしたようである。なおここでの冴野を、一色誠子^⑧は紫苑の「作り出した」冴野「ともとれる」としていた。東郷克美^⑨も「自分の中にも、冴野の『裸の女』の激情が生きていることを認めるのだ」と記していた。様々な解釈が考えられるが、紫苑の夢のなかに冴野が現われ、その胸に手を添えられていた兼家も、途中から（紫苑の夢の中で目覚めて）同じ夢を見たのではなからうか。紫苑の内なる冴野との感応から、夢うつつの紫苑が短剣を持ち出す仕儀に至つたと解しておきたい。

さて最後に「何事もなく」て「無事で好かつた」と話す兼家に紫苑は、「生きた二人の女といふものが、思ひ余つて一人にな」り、「一人の殿に仕へるといふことも、有り得るやうな氣」がしてきたと言う。紫苑はこの夢を見たことで、(男の「情痴」と孤独を解する)冴野の願いと渾然となつたわが心の様を自覚したようである。

なお兼家も彼女に「女のむねの奥にも、二人の男が同時に深い事情があつて住む場合だつて、あるやうに思はれる」と返答した。それは兼家から去る前に冴野が「わたくしのからだに、殿と、そして忠成の二人の男が棲んでゐる」と独白していた場面と照応する。また竹内清己^⑩が、恋

「愛において、競争相手に愛しさを抱いた「共生体験」を「経た兼家の（諒解）」が、こうした感慨に表われたと記したように、兼家はここで、かつて牙野と離れたもの同士の間から忠成と「結び合った」愛しさを交わした記憶をも想起したろう。彼は牙野という「女のむね」に今も、自分と忠成が混然として在る、そんな思いを巡らせているわけなのである。

四 おわりに

「かげろふの日記遺文」で最も複雑な心理の襞をみせる人物の紫苑は、当初「人の気をよせつけない」潔癖で理性的な女性だった。それが兼家という男の妻となることで、潔癖ゆえに封印されていた自分の官能に目覚める一方、夫の望む「一介の女」となれず、夫の色好みを前に苦悩する。しかしそんな自己を凝視し、孤独な心の移ろいをわが筆で表現する糧としてゆく。夫婦の葛藤はしかし、死産後の牙野が訪れて後、兼家の心の内を解せるようになった紫苑の態度が軟化することで好転に向かう。

「無節の純粹」を身に体した牙野は自ら計らわず、あくまで兼家を束縛せずに尽くし、男の気まぐれな愛情を全肯定するかたちで受け容れていた。そうした「平明無色の心構へ」は紫苑にも伝わり、我を張りながらも兼家好みの女性となる生き方へと性質を変えさせてゆく。

牙野は生活のため金銭に固執することもなく、毅然として兼家達の前から姿を消した。原典では一時的に言及される存在でしかなかった「町の小路の女」牙野が、あたかも慈悲深い聖女のように兼家には映り、彼の記憶に長く刻されていったことは想像に難くない。

ところが愛執ゆえだろうか、牙野は最後の場面で紫苑の夢のなかに現われる。しかしなお、兼家が二人のうち一人の女を選ばずにいた「お心

づかひ」に生涯の感銘を受けるところに、彼女の精神性の高さがうかがえよう。

「裸の女」牙野が没個性的かつ受動的な存在である故に兼家の理想であり得たのと同様、兼家も「情痴の赤ん坊」として「裸」の男に徹しようとしている故に、情痴の世界における男性像の典型たり得ている。牙野は、情痴に溺れる男性達にとっての理想的女性像、ひいては「裸」の男女の関係における女性像の典型といい得るだろう。

情痴の世界、そこで男は一人の女性の心のなかだけに住めない。「男自身肉体にあるもの」に抗えない男の孤独はやむことがない。兼家の女性を求めては安住を知らない生き方は、男性の内部に根強く存する無限の憧れの発露であり、安住を求めては男の不実を悩む女性を苦しませる。結局それでも男は「心に謝りを持」ちながら流離をやめない。

兼家は最後の場面で呟く、「一さいは終つたのか、生きてゐる限り、ものの終りといふものは、何処にもないのではないか」と。「この無頼の男」の情痴を求めての彷徨は果てしもない闇へと続くがごとく「終り」なく続くのである。自己を偽らず、妥協を知らない「情痴の赤ん坊」に真の安住はない。

かねて兼家は紫苑に対し「この女こそ私の生きるかぎり」、心悩みなながらもついて来るだろうとの「恐ろしい予感」を抱いていた。また「私の生涯をえがき尽し、詠み分け、見とどける」存在だとも思う。「偉いといふことに女の美しさがある筈がない」と考える兼家にとって、紫苑は自分にはない「物を書くちからを持」った「恐ろしい人間」であった。一方、牙野は紫苑と違い、兼家が自分に嘘をつかず「そのまま立ち対へる」女性であった。

しかし最後に、牙野の夢を見て紫苑は、二人の女が一人になって「一人の殿に仕へることも、あり得る」気がし始めたと話していた。これは

「殿の、おん心にあるもの」が「私をそのやうに躑け」て来たためだとも彼女は言う。あるいは、かつて冴野が紫苑の前に現われてから紫苑の心が変わったように、このあと紫苑は（原典とは異なり）、冴野の人間性をとり容れた豊かな女性として兼家に愛情を尽くすようになるのではないか、と思われる。その意味でも紫苑は、兼家と紫苑という「情痴」の世界の典型たちとの縁を通して人間としての容量を広げてゆく、「かげろふの日記遺文」ので最も振幅ある人物だと考えられる。

このように「かげろふの日記遺文」は、情痴の世界を生きる人間ひいては裸の男女として在るものの、逃れられない性の「哀れ」を物語った小説である。紫苑と出会う前から、兼家と冴野はすでに「情痴」の世界の住人として在ったのだ。その世界に没入することで紫苑の心身も、情痴に色濃く染められていったわけである。二人の典型的人物との関わりから、情痴に焦点化された人間観の機微を知りゆく紫苑のいわば成長史が、この小説の主調だといえよう。さらにはむしろ、王朝を舞台として、男の情痴を肯定的に描いたある種のメルヘンとみなすのが、幻想的傑作「かげろふの日記遺文」の本質に近いかも知れない。

註

- ① 実際の翻訳は折口信夫、のち犀星に師事した小谷恒があたった。小谷「犀星の日々」（『逍空・犀星・辰雄』花曜社、昭六一・六二〇）一三九頁に「昭和三十年秋、犀星の代りに私の訳した『蜻蛉日記』」云々とある。
- ② 佐々木幹郎「解説うたえどもやぶれかぶれ——『かげろふの日記遺文』論」（『かげろふの日記遺文』講談社文芸文庫、平四・一〇・一〇）二三〇頁。なお吉田精一が「あまりにも王朝の風俗習慣、その他の歴史的な土台をふみにじっていること」をこの小説の欠点に挙げていた（『室生犀星と王朝物語②』『国文学解釈と鑑賞』二五巻七号、昭三五・六・一 一四九頁）が、拙稿では原典との詳しい比較は割愛する。

- ③ 「昭和三十四年度野間文芸賞室生犀星氏『かげろふの日記遺文』に決定」（『群像』一五巻一号、昭三五・一・一）二三九頁。
- ④ 田山花袋「愛と恋」（『婦人之友』昭二・一〜二「道綱の母」と改題）『田山花袋全集第十二巻』花袋全集刊行会、昭一一・七）のほか堀辰雄「かげろふの日記」（『改造』昭一二・一二）、その続篇「ほととぎす」（『文藝春秋』昭一四・二）がある。
- ⑤ 「『かげろふの日記遺文』再読——その評価をめぐって——」（『室生犀星研究』三〇輯、平一九・一〇・二〇）一三〜二三頁。
- ⑥ 「三通りの女の愛野間賞を受けた室生犀星さんの『かげろふの日記遺文』」（『図書新聞』五三〇号、昭三四・二・五）五面。
- ⑦ 「室生犀星のメタ・フィクション——『かげろふの日記遺文』について——」（『芸術至上主義文芸』一八号、平五・一・三〇）七八頁。
- ⑧ 榎本隆司「犀星試論——『かげろふの日記遺文』考——」（『学術研究—国語・国文学編—』三二二号（早稲田大学教育学部）、昭五八・一二・三二）七〇頁。
- ⑨ 「『かげろふの日記遺文』論」（『新日本文学』一五巻三号、昭三五・三・一）一四四頁。
- ⑩ 「室生犀星と王朝文学」三弥井書店、平成一・七・一 二七五頁。
- ⑪ 「室生犀星」（『群像』一六巻五号、昭三六・五・一）一八三頁。
- ⑫ 「室生犀星論——出生の悲劇と文学——」（三弥井書店、昭和五六・九・三〇）二二二頁。
- ⑬ 前掲「犀星試論——『かげろふの日記遺文』考——」七〇、七二頁。
- ⑭ 前掲「室生犀星のメタ・フィクション——『かげろふの日記遺文』について——」七九頁。
- ⑮ 「犀星の小説の方法——『かげろふの日記遺文』について」（『国文学解釈と鑑賞』四三巻二号、昭五三・二・一）一〇六頁。
- ⑯ 奥野健男はこの小説につき「晩年の犀星にはひとりの、町の小路の女がいた（中略）自分の死後（中略）杳として行衛をくらましてしまふに違いない」その女性に送った「かなしみとあわれの極致とも言うべき恋文」だと記した（『室生犀星「かげろふの日記遺文』』『国文学解釈と鑑賞』三五巻四号、昭四五・四・一 一〇九頁）。
- ⑰ 「作品論の実際 原典との比較——『かげろふの日記遺文』室生犀星——」（『国

- 文学解釈と教材の研究』一三卷九号、昭四三・七・二〇）三三三頁。
- ⑱ 「室生犀星『かげろふの日記遺文』論—堀辰雄『かげろふの日記』を通して—」（『室生犀星研究』六輯、平一・二二・二〇）四二頁。
- ⑲ 前掲「犀星の小説の方法——『かげろふの日記遺文』について」一〇八頁。
- ⑳ 「室生犀星にみる愛の宗教——『かげろふの日記遺文』を中心に——」（『室生犀星研究』一輯、昭六〇・二・二八）六〇頁。
- 追記 本文の引用は新潮社版室生犀星全集によった。

（呉工業高等専門学校准教授）